

第1章

言葉の発達と脳科学 ～東アジアでの研究と実践～

(2009年9月11日 日本・東京にて)

■主催…チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)、お茶の水女子大学G・COE
■共催…(株)ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所
■後援…中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、
日中教育交流会議



外国語としての第2言語の習得と脳科学

小泉英明

Koizumi Hideaki

株式会社日立製作所役員待遇フェロー

●ヒトの言語と遺伝子配列の変化

言語の発生や獲得に関しては、言語学の中でも諸説ありまして、何が本当に正しいかは、これからの研究を待たなければなりません。ですから、明らかになっていることと、そうでないことを慎重に見極める必要があると思います。まずは、進化の視点からお話をさせていただきます。

人間の第一の特徴は、コミュニケーションにあります。階層的な文法を進化の中で獲得したことが、人間と他の動物を分ける大きな点だと思えます。どういう進化の過程の中で、その能力が獲得されたのかはまだ謎ですが、現在さまざまな研究が行なわれています。

私たちに最も近い種と言われるのはチンパンジーです。遺伝子の解析をすると、DNAの配列はヒトと1%強の違いしかありません。そ

の本当にわずかな差に、我々が言語を獲得した原因が含まれているのではないかという可能性が指摘されています。

そのような研究に関連する一例として、英国で文法の一部が理解できない家系の子どもたちについての研究成果が2001年に発表されたことがあります。正確に言えば、まだ作業仮説の段階と考えられますが、転写制御因子と言われる遺伝子の中のFOX P2という部分に2か所だけ突然変異が見つかりました。

実は、ヒトのFOX P2という遺伝子の配列は特異的、つまり他の動物たちとは異なるものなのです。そのことから、30億個ある塩基配列のわずかな数か所が変わったことにより、人間は言葉を話すようになったのではないかという仮説が提起されています。

また、遺伝子のFOX P2というのは、自閉症等にも関係すると言われる基本的な遺伝子で、神経と神経の接続、シナプスの形成など、さまざまな機能の発現にも関係する可能性があると言われています。

● 相対音感と言語の起源

最近、私は個人的に相対音感が言語の起源を知る上で重要だと考えています。音楽家にとって重要なのは絶対音感であると言われることがあるために誤解されやすいのですが、相対音感こそがヒトとして進化する過程で後に生まれてきた、ヒトの本質と深くかかわるものなのです。実際、生物学的には絶対音感の方がより根源的なものであり、昆虫などは絶対音感の持ち主です。

人間にとって相対音感がなぜ重要なのかを簡単な例でお話しますと、例えば、お父さんが「おはよう」と子どもに言ったときと、お母さんが「おはよう」と言ったときとは、当然、ピッチつまり音程は違うわけです。本当は別物であるはずなのですが、我々は全然気にしない。両方とも同じ「おはよう」と受け取るわけです。これは相対音感があるからです。このように音の高さが違って同じ範疇でとらえることができるということが、言葉の起源と関係があるのではないかと、私は感じています。実際、チンパンジーに相対音感はあるほどありません。

● 第一次感覚野と臨界期

外国語の学習というとすぐ出てくるのが臨界期という話です。コンラッド・ローレンツやヘスの刷り込みの研究、これが大変よく知られ

ているわけですが、生後24時間経ってしまったら刷り込みはまったく行われないういう非常にきれいな実験結果が、1959年に出版されています。

それで、人間にもこういう臨界期があるかのごとくに言われることがよくあり、ときに大きな誤解を生むケースがありますが、明瞭な臨界期というのは視聴覚など感覚野にかかわるものが多く、限定的なものであると思われます。例えば発音のようなもの。これはクルの有名な実験がありますが、母音や子音の聞き取りというのは子音の方が先で、1年ぐらいで感覚が閉じて、聞き取れなくなってしまう。我々が年を取ってからいくらLとRを聞き分けようとしても、その差を海外の人のように正確に範疇認知することはできないと言われていきます。そういう第1次感覚野に近いところは臨界期が明確に見られませんが、高次のところは明確な臨界期が見られないケースが多いわけです。

現在では、臨界期がどういうメカニズムで発生しているかというのが少しずつわかってきています。これはJSTのCRESTでヘンシュ先生もされている研究ですが、神経伝達物質のGABAが臨界期にかかわっているというものです。このGABAの働きを亢進させるような物質、ここで言いますとベンゾジアゼピンなのですが、この物質で臨界期を早める、つまり学習できる時期を早めることができるのです。一方、いつまでも若い子どものように学習を続けたいということならば、その逆を行えばいいわけです。今度は拮抗薬の、GABAのantagonist、この場合はDMCMで実験していますが、それを与え

ると臨界期が後ろへ引き延ばされる。少し年とってからでも若いときと同じようにやれるということがわかってきました。もちろん、動物での話の段階です。

●外国語の学習と年齢

年齢によって言語の学習にどのような差が生まれるのか、そのような研究がなされています。例えば、スペイン語を母国語とするさまざまな年齢の人々が、第2言語として英語を学習した場合の習得度合いについての研究結果があります。全部で61名ぐらいを対象にしたものですが、若いときに移住してきた人たちはかなり高い第2言語の英語の能力を得られています。

一方で、臨界期を過ぎても母語話者のレベルを獲得することが可能であるという例もあります。

これは英語のケースですが、オランダ人が大きくなってから始めたのに完全にネイティブと同じようにしゃべれるようになったという研究です。しかし、このケースで気をつけなくてはいけないのは、両方とも言語としては距離の近いものだということです。そのために差し引いて考える必要がありますが、実際にこういうことが起きることがあります。

それから、逆に、子どものうちから言語を学んでも、母語話者のレベルに達しないケース、つまり小さいときから英語をきちんと教えたにもかかわらず、英語がマスターできなかったケースも報告されてい

ます。

例えば、英語話者の家族の子どもがフランス語で教える学校で学ぶ。結果としては子どもによってフランス語のレベルがすごくばらついたということです。フランス語がうまくしゃべれるようになった子どももいれば、全然そうではない子どももいるのです。

●学習における動機付けの重要性

学習について考えるには、動機付けの役割もとても重要です。何としてもやらねばならない、そう思ったときにドーパミンが出てきますが、それが記憶の定着に大きく寄与しているということが、データで明らかになり始めています。つまり、大事なものは熱い心なのです。何とかしてやりたい。興味がある。それがあると臨界期なんかどこかへいってしまいうわけです。

人間の脳は構造的に中心部から外へ向かって進化してきました。ですから、進化の初期の、これは爬虫類とほとんど同じ形をしています。生命を維持する脳、脳幹が中心部にあります。古い皮質というのは生きる力を駆動する脳、辺縁系で、ここが働かないことにはいくら知識があっても宝の持ちぐされです。

一番後になって進化してきたのは、まさに人間らしい脳、前頭前野を含めた大脳新皮質です。そこが知育によっていくらか充実しても、内側のところからそれをやりたい、何としても実行したい、そういうパッションが生じなかつたら、知能は十分に生かされません。特に乳幼児

期に発達する脳の内側の生命力とかかわる教育、あるいは保育、あるいは育児がとても大切だと考えられます。

●脳機能の連携と乳幼児の発達

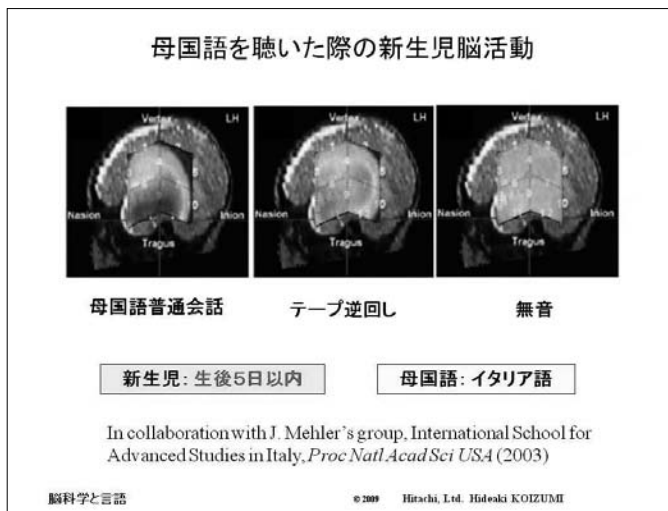
乳幼児期の脳の一番根元のところの発達はとても重要なのですが、現在はまだその研究は欠落しています。もちろん行動学的な貴重なデータはいろいろ出てきていますが、脳の中がどうなっているのか、子どもが生まれて、あるいはお腹の中で、どういう形でその脳が育つていくのか、どのように神経が接続されていくのか、ここがよくわかっていないのです。

我々が考えている機能というのは、別々に見えていて、実は全部が連携しています。覚醒、睡眠、情動、運動、思考、もちろん言語も、すべて連携している。その事実を表す典型例は、自閉症スペクトラム障害です。例えば、カナー型の場合は顕著です。言語の障害をもって、運動の障害もあるし、睡眠の障害もある。それらは全部リンクをしているのです。乳幼児期に、それらの機能がどのように脳の中でリンクし、発達を遂げるのかを明らかにするというのが、これからの神経科学の大事な課題の一つだと考えられます。

こういう脳の総合的な機能の連携について、いろいろな方々と共同して研究していますが、研究を通じて、私が個人的に感じているのは、芸術というものの価値です。芸術の本質は何だろうか、芸術というものが人間の発達にとって、とても大切なものではないかというこ

とです。

また、言語も芸術同様に脳機能の連携と密接に関係しています。言語を考えるとときにも、言語というのは、本当は何のためにあるんだ、何の役に立つんだらう、子どもたちに言語を教えるとしたらどこから入ったらいいのか、そのところを学際的に考えていく必要があるでしょう。



「早期閲読」を基盤に、幼稚園カリキュラムについて

朱 家雄

Zhu Jiaxiong

華東師範大学教授

◎サマリー

絵本作品『さかなはさかな』に対する二通りの解釈と推論で、世界と中国の幼児教育理論と実践の発展の方向をわかりやすく述べる。また、歴史と地域のカテゴリーを踏まえ、現在の就学前教育界が関心を寄せる「早期閲読」※の意義と機能を考える上で必要となる背景を紹介する。さらに、報告者のこれまでの研究実績から出発し、自身の早期閲読との出会いから実施経験を踏まえて、特にここ数年間に早期閲読を基盤として、中国で強力に押し進めてきた、幼稚園カリキュラムの制定と実施について述べる。

※早期閲読とは、幼児期に絵本や活字を読ませる読書活動を指す。
詳細は巻末72ページの用語一覧を参照

◎幼児の早期閲読の背景

——世界と中国の幼児教育理論と実践の方向性

(1) 一つの絵本に対する二通りの解釈と推論

レオ・レオニの絵本作品に、『さかなはさかな』というお話がある。このお話について異なる解釈をすることで異なった教育的意義を導き出すことができる。内容は以下の通りである。

小魚とおたまじゃくしは仲良しで、いつも一緒に池の中で泳いでいた。

ある日、おたまじゃくしは蛙に成長し、池を離れ、友だちの小魚の前からいなくなつた。小魚は、魚と同じだつたおたまじゃくしに、どうして足が生えたのかとても不思議だつた。しかも自分の前から、池から、姿を消してしまつた。しばらく経つたある日、蛙はご機嫌な様子で池に戻り、小魚に、池とは別の、もう一つの多彩な世界で、羽の

ある鳥や、四本足の牛や、歩くことができる人間などを見たと言った。小魚は、蛙が話した池の外の世界の、羽の生えた魚や四本足で角が二つある魚、おとことおんなと子どもの魚が歩く姿などを想像してみた。さらにはどうしても行つて見たくなくなり、一生懸命陸に飛び上がったのだが、すぐ死にそうになり、ちよつと餌を探していた蛙に助けられ、池に帰り着いた……。

ロマンチズム的な学者は、『さかなはさかな』は、教育者に対しかなり啓発的な意義のあるお話であり、次のように解釈できると考える。「子どもは子ども」、「子どもは子ども」の世界の中で自由に生活し、想像を膨らませ、限らない創造の機会をもっているのだ」(小魚は、蛙が話してくれた池の外の世界、羽の生えた魚、四本足で角が二つある魚、おとことおんなと子どもの魚が歩く姿などを想像してみた)。「子どもは、自分の経験を基礎にして学習を進め、その学習は自主的に行なっている」、「子どもがいったん自分の生活環境から離れると、すぐに問題が起きしまう」(さらにはどうしても行つて見たくなくなり、一生懸命陸に飛び上がったのだが、すぐ死にそうになり)……。

これをもとに、この物語を考えてみよう。

- ・ 同化することは、子どもの学習の根本であり、遊びは子どもの基本的活動である。
- ・ 学習の過程は、子どもがすでに持っている自己のパターンを環境に合わせてようと努力する過程である。
- ・ 教育は、子どもの論理的発達のレベルに合わせてべきである。

・ 教えることは、発達に従属すべきもので、相反するものではない。

もし、ロマンチズム的傾向を取り去り、このお話に別の解釈を試みると、教育者に対してまた別の示唆を与えるだろう。具体的に言えば、「魚」は、いずれは「岸に上がる」ことをしなければならぬ。これは「進化」の必然である。つまり、「子どもの想像と創造は、自らの経験が基礎になるのはもちろんであるが、子どもの成長について言えば、それだけでは全然足りない」、「子どもはより知識の多い大人の援助のもとに学習させるべきだ」……。

これによって、この話を考えてみよう。

- ・ 「魚が岸に上がる」ために、しっかりと準備をして、『さかなはさかな』のまま留めてはならない、そうしなければ「魚」はいつまでも一歩前進ができないままだ。
- ・ 効果的に教えることは、子どもの発達を促進することができる。
- ・ これにより、カリキュラムの実施と教師教育などの面でも、お話の解釈をさらに広げることができる。
- ・ カリキュラムは、子どもの発達に合わせていくだけでなく、例えば文化の適合性や政治の優先度等、その他多方面での意義も有する。
- ・ 何を教えればよいのかわからないというのでは、教師は務まらない。だから教師は教育や教授法を学ぶ中で、多方面の知識と能力を身につけるべきである。

このような理論で『さかなはさかな』のお話を解釈し、考えていくと、「教育は子どもの発達の法則に従うだけでなく、その他の多くの面にも配慮しなければならない」ことがわかってくる。そして教師は必ず実際に教育や教授法の中の最も基本となるものを確実に身につけられるようにしなければならない。だが、こうした理論の方向で、このお話を解釈し、推し広げていくと、多くの問題提起につながり、疑問も湧いてくる。ただし、これらの問題や疑問は、例えば以下のように、やはり教育実践の第一線から湧いてくるものである。

- ・ 効果的な教育や教授法をどのように実施すればいいのだろうか。(すなわち子どもの発達のニーズに合っていて、その発達を促し、さらに社会のニーズにも合うようなもの)か。
- ・ 教師が身につけるべき知識と技能とはどのようなものだろうか。
- ・ 効果的な教育法や教授法を実施できる教師をどのように養成するか。

(2) ユネスコの呼びかけ

ユネスコは1982年からすでに全世界に向けて「全ての人に読書を」という呼びかけを行い、社会における全ての人が読書をし、書物と読書を欠かすことのできない生活の一部とするよう求めた。80年代より、先進国数カ国では、子どもの知的発達の重点を読書能力の育成に移ってきている。

アメリカでは、ブッシュ夫人が、教育イニシアチブ“Ready to Read, Ready to Learn”を推し進めた。夫人は、ファーストレディの任にあ

る間ずっと努力を惜しまず、全ての子どもが基本的な読書能力を身につけられるよう保証していくことを誓った。

1998年9月から1999年8月は、イギリスの読書年であった。ブランクett教育大臣が、読書年を進めることでイギリス人の読書に対する態度を改め、読書の楽しさを取り戻し、「全ての人が読書をする国を建設する」(Build a Nation of Readers)と発表した。

● 私の研究と論点

(1) 私の研究

1986～2000年

- ・ 構造主義を如何に早期教育の実践に運用するかに取り組んできた。結果、幼児に自主的活動の中で言語能力を発達させることは効果が低いということがわかった。
 - ・ 「遊びを基本活動とする」という声が主流である中で、「学びも基本活動である」という観点を出し「遊びと学びを有機的に結合すること」を主張。
 - ・ 幼稚園実践の中で、早期閲読は幼児の言語教育に効果的であることに気づき、上海浦南幼稚園で早期閲読を実践した。
- 2000年以降
- ・ 数多くの幼稚園教育の実践研究に参加し、さまざまな幼稚園カリキュラムを作成し、幼稚園教師用や幼児用の各種書

籍を執筆した。

・幼稚園カリキュラムの中で、幼児言語学習の内容と素材を徐々に充実させてきた。一部のカリキュラムでは、早期閱讀を中心とするカリキュラムを試みた。

・マルチメディアで早期閱讀のカリキュラムを編成し、効果的にカリキュラムを実施するようになしてきた。

(2)私の論点

・早期閱讀は生涯学習の基礎である。幼児期に、読書を経由し、学習の成功へ通ずる、一本の道を敷いてあげなければならぬ。

・早期閱讀は幼児の言語発達に独特の価値をもつばかりではなく、幼児はそれにより読書の楽しみを味わい、読書習慣を身につけ、一人で読書することも可能になる。

・早期閱讀の多くが絵本を通して行われるものである。物語の中に論理的関係が存在し、前後の絵につながりがある。幼児はすでにもっている知識や経験を活用して絵や物語の意味を理解することが可能になる。

・幼児の心身の特徴に基づき、早期閱讀が提供する内容は幼児の想像力を発達させることを主とすべきである。児童文学作品や童話は言葉や表現が生き生きとして、色使いが鮮やかで、ストーリーが面白いので、子どもに好まれ、受け入れやすいものであろう。



上海市幼稚園教諭の文化的状況についての調査

汪寒鷺・姜勇・陳妍

Wang Hanlu・Jiang Yong・Chen Yan

華東師範大学

●問題提起

「我々のこの時代において、文化は一つの決定的な力である」Lazalo (1969)。教師はひとつの「文化」的存在として、「文化」と密接に関わる教育の使命を担っている。「教育人」としての教師、その文化状況は、教師の業務の発展にとって重要な鍵となる。教師の発展と教育の革新の可能性が広がるのか、制限されるのか、その鍵は教師文化の中に多く潜んでいるのである。

文化的生活状況は、教師の個々の文化状況の重要な構成部分として、教師の余暇生活様式と文化的活動状況を体現することができる

以外に、我々がここから着手して、さらに教師の文化状況の内容に踏み込んで考えていくための一助となる。

近年における国内外の教師文化に関する研究を概観すると、主に「集団文化」に焦点が当てられており、研究対象は主に大学および小・中学校に集中している。例えば、Kinze (2003) は、異なる文化集団の文化的知識および異なる文化的背景の教師と子どもがお互いに理解し合う方法や文化的影響力を参考に教師文化の価値の研究を進めている[1]。Sinson (2006) は、教師の集団文化を発展させるための12項目の対策を提案した[2]。Soetaert (2004) は、集団文化が教師の教

育実践に与える影響について指摘した[3]。中国内の学者の龐海芍(パン・カイシャク)ら(1999)は、理工系大学の教師の文化的素養について調査と分析を行った[4]。胡振学(2006)は、さらに進んで幼稚園を拠点とした研修文化を作り、教師の仕事力の向上を提案した[5]。

ところで、このように国内外の学者は、常に教師文化の集団性に関心を寄せ、集団文化の特徴や役割に偏重するあまり、かえって集団文化を構成する教師の個々における文化の実状をよく把握していないと思われる。幼稚園教師の個々の文化生活の実状についての研究は乏しい。

● 研究調査の方法

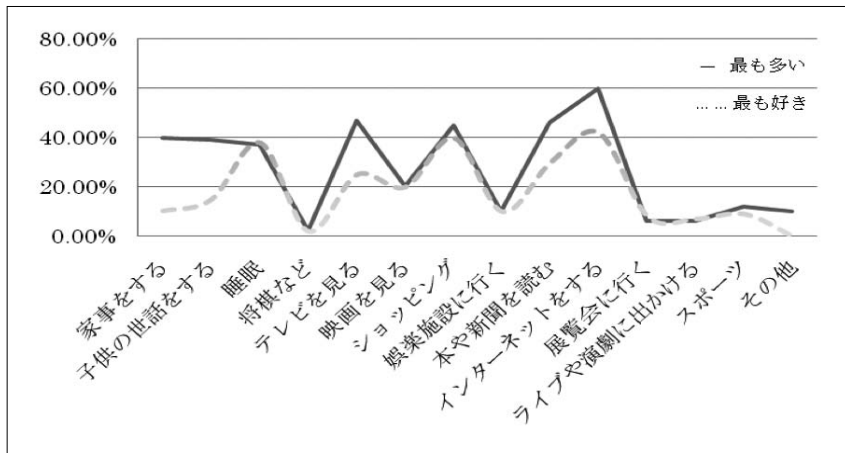
本研究はオリジナルのアンケート（内部一致性係数0.89）を作成し、教師の文化的生活の内容・好み・目的・具体的なタイプおよび文化的生活方面での毎月の支出などを調査した。上海の19の区・県内の17の幼稚園に320部の教師対象アンケートを配り、304部の有効回答が得られた。

● 結果とその分析

(1) 幼稚園教師の文化的生活状況の総体研究

文化的生活の中で、教師の「最も多い」の回答は、インターネットをする・テレビを見る・本や新聞を読む・ショッピングに出かけることで、教師の「最も好き」である回答は、ショッピングに出かける・インターネットをする・睡眠をとる・テレビを見ることであった。「最も多い」と「最も好き」を比べると、「家事をする」と「子どもの世話をする」の差が大きく開いていた——図●参照。また、教師が

インターネットをする一番の目的は教育関連の資料を調べるためであった。



図● 幼稚園教諭の余暇文化活動の内容と好み
Figure 1 The Main Items and Preferences in Teachers' Cultural Life

テレビのチャンネルと番組のジャンルを見ると、幼稚園教師がよく視聴している上位3つはそれぞれ、生活ファッション関連チャンネル・ニュースチャンネル・娯楽チャンネル、娯楽番組・報道番組・生活関連番組で、教師が娯楽ファッション関係とニュース類を特に好んでいることがわかった。「娯楽で暇をつぶす」ことは教師がテレビを見る最大の目的である（83.1%）。映画では、ハリウッド映画と香港映画が二大人気で、大陸映画・日韓映画・ヨーロッパ映画の割合が均等である。テレビドラマでは、香港・大陸・韓国が大部分を占め、日本のドラマは最下位であった。

インターネットとテレビ視聴以外に、教師が最も多く行なっているのは、読書や新聞を読むことで、書籍の種類は、まず生活ファッションで、次は軽い小説類で、教育専門書の類は第3位で、第4位の文学との差は小さかった。教師が読書する目的は、主に生活の趣味を増やすこと（63.8%）と娯楽を楽しむこと（59.1%）である。

40.1%の幼稚園教師が毎月文化的生活面へ

使うお金は、51～100元で、これは出費が最も多い層であるが、0.6%の教師は毎月の文化的生活方面に全く出費しない——図2参照。

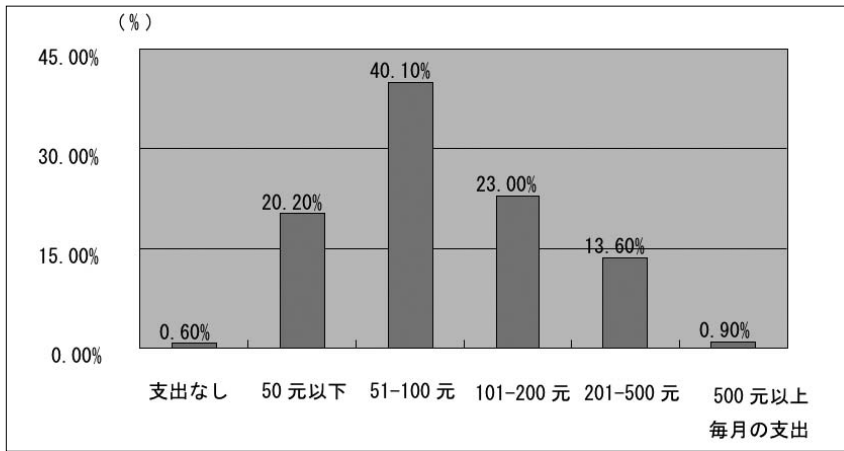


図2 幼稚園教師の毎月の文化的生活への支出
Figure2 Teachers' Monthly Expenditure on Cultural Life

(2) 幼稚園教師の文化的状況の違いの比較

幼稚園教師の文化的状況は主に年齢によって違いが表れることが、調査によってわかった。文化的状況の内容は、20～30歳の教師とその他の年代の教師との違いが最も大きく、特に30～40歳の教師との違いが最も多い。家事・子どもの世話・映画鑑賞・街でのショッピング・娯楽施設に行く・インターネットをするなどの項目では、2つの年代の教師の違いが顕著に表れていて、2つの年代の間になり重要な転換点があることがわかる——表1参照。文化的生活の好みでは、各年代の教師の「家事をする」に対する違いが最もはっきり表れていた——表2参照。

● 考察

(1) 理想と現実

教師の余暇の時間では、「家事をする」と「子どもの世話」について、教師の「最も好き」と「最も多い」の回答にかなりの開きがある。これは、「女性特有」とも言えるが、教師が自身の文化的活動の幅や時間を削られていること

を反映している。

教師の毎月の文化面への支出金額は、51～100元に集中し、人数の割合は40.1%である。2007の現在の「農民工」（出稼ぎ農民）の文化的状況の調査報告の結果によって、20%近い出稼ぎ農民が毎月文化的方面に、51～100元を支出していることがわかっている[6]。これでは、文化的レベルがより高く、収入もより高い教師集団が行う文化的方面への実際の投資としては、私たちが理想とするレベルを実現しているとは思えない。こうした現象が起こる原因と思われる一つには、教師が幼稚園で提供されている文化施設や福利を利用することによって、書籍類やインターネットなどの支出が軽減されていることが考えられる。二つめに、幼稚園教師の収入は出稼ぎ農民より高いとはいえ、その生活レベルを維持するだけの出費をした残りはそう多くないので、さらに文化面への出費をしたくない気持ちがあること。また三つめに、教師自身が、文化面にお金を使う必要性を感じていないか重視しておらず、どちらでもよいと考えていることがある。

表① 幼稚園教師の文化的生活の内容の違いについての統計
Table 1 Post Hoc Test for Teachers' Main Items in Cultural Life

		家事をする	子どもの世話	映画鑑賞	ショッピング	娯楽施設利用	本や新聞を読む	インターネット
年齢	比較年齢	Mean Difference(I-J)						
20-30歳	30-40歳	-0.38*	-0.52*	0.24*	0.25*	0.10*	0.30*	-0.38*
	40-50歳	-0.66*	-0.13	0.33*	0.12	0.15	0.25*	-0.66*
	50歳以上	-0.81*	0.19	0.33	0.45	0.15	0.30	-0.81*
30-40歳	40-50歳	-0.28*	0.38*	0.09	-0.12	0.04	-0.05	-0.28*
	50歳以上	0.43	0.71*	0.09	0.21	0.04	0.01	0.43
40-50歳	50歳以上	0.15	0.32	0.00	0.33	0.00	0.04	0.15

表② 幼稚園教師の文化的生活の好みの違いについての統計
Table 1 Post Hoc Test for Teachers' Main Items in Cultural Life

		家事をする	映画鑑賞	ショッピング	本や新聞を読む	インターネット
年齢	比較年齢	Mean Difference(I-J)				
20-30歳	30-40歳	-0.04	0.12	-0.05	0.01	0.22*
	40-50歳	-0.23*	0.23*	-0.06	-0.06	0.20
	50歳以上	-0.40*	0.29	0.50	0.57*	0.12
30-40歳	40-50歳	-0.19*	0.11	-0.01	-0.08	-0.02
	50歳以上	-0.36*	0.17	0.55*	0.58*	-0.10
40-50歳	50歳以上	-0.16	0.06	0.56	-0.50	-0.08

注：“*” p < .05

(2)「休閒」と「修身」

幼稚園教師の文化的生活状況の最も大きな特徴は、余暇と娯楽である。全体的に見て、睡眠・テレビ視聴・インターネット・ショッピングに出かけるなどの活動は余暇娯楽活動に属する。細部で見ると、本や新聞を読むことと言っても、教師の好みは、やはり生活ファッション・流行関係・エンターテインメント小説などの読み物である。幼稚園教師集団の中で視聴率が最も高いのは娯楽番組である。教育専門書籍・ニュースチャンネル・報道番組なども教師が比較的よく見るが、教師が書物や雑誌を読んだり、テレビを視聴する主な目的は、のんびり楽しみたい、趣味を広げたいということである。

「休閒(シユーション、余暇の意味)」と「修身(シユーション)」は、発音上は少しの違いだが、内包するものは大きく違う。一方は娯楽、一方は教養で、言わば文化的生活中身の質と最終結果という関係である。教師の文化的生活が、もし、ただ単に「余暇(休閒)」中心で、「修身」という効果がなかったら、なんと残念なことだろう。しかし、教師は仕事で疲れ果

てて、一息つく暇もないのが現実で、いったん暇な時間ができると、自ずと娯楽を選んでストレスを和らげているのであろう。そこに「修身」しなさいと言えば、さらに疲れてしまうのではないだろうか。

ドイツの哲学者ヨゼフ・ピーパー (Josef Pieper) は、このような考えを述べている [7]。余暇は文化の基礎であるという観点から、余暇は、ごく普通の人生哲学であって、ライフスタイルでもあり、暇な時間に、じっくり聞いたり見たり、深く考えたり、想いをめぐらせたりすることは、世の中への理解を深めることができ、この上なく楽しい。暇な時間がなかったら、人間は思想活動ができないし、文化も生まれようがない。「余暇 (休閒)」が「暇」を生み、「暇」と同時に「修身」にもってこいの文化的生活の時間を得られるということ、考えてみれば、教師にとってもっと良いことではなからうか。

(3) 自国文化と外来文化

外来文化が自国文化に浸透していくのは、初めは一冊の本、一本の映画、一つの連続ドラマのような小さいことに過ぎないだろう。

しかし、それがだんだん強大な文化的衝撃力に変化してしまうのである。

幼稚園教師が選ぶ映画をみると、国内映画はハリウッド映画や香港映画の狭間で最もシェアが小さく、国内ドラマは、香港や台湾、ヨーロッパ、韓国のドラマに押されて力を失っている。外来の映画やテレビ作品の方が、教師の気晴らしとしての満足度が高いのかもしれないし、あるいは、上手な宣伝や、内容・制作・技術のすばらしさで、人々の心を虜にしているのかもしれない。

このことから、もう一度中国文化の自国での立場をじっくり考えざるを得ない。自国に在る我々は、「傍目八目」と言う如く、対局者だからわからないのか、それともずっと外来文化を味わってきた我々は、傍観者としても「傍目八目」とはいかずはつきりわからないのであるか。費孝通 (1997) は、「文化自覚」について論じた。文化自覚とは、ある文化の中で生活している人がもっており、その文化の由来や形成過程、特徴や発展の方向を理解していることを言う [8]。中国文化と外来文化の関係が、「囲碁」のような対戦関係から「和

して同ぜず」になり、「文化自覚」への過程がだんだん進んでいく時、あらゆる中国の伝統文化と自国文化に対する再確認が自ずと生まれてくるだろう。

■参考文献

- [1] Charles K. Kinzer, Xiaodong Lin, The Importance of Technology for Making Cultural Values Visible: THEORY INTO PRACTICE (J). 2003, 42 (3) : 234-242.
- [2] Lynn Stinson, David Pearson, Beverley Lucas: Developing a learning culture: twelve tips for individuals, teams and organizations. Medical Teacher (J). 2006, 28 (4) : 309-312.
- [3] Ronald Soebert, Andre Mottart, Ivo Verdoodt: Culture and Pedagogy in Teacher Education. The Review of Education, Pedagogy, and Cultural Studies (J). 2004, 26 : 155-174.
- [4] 龐海芍等, 「理工科大學教師文化素養調查與分析」, 高等教育研究 (J). 1999, 1 : 75-79.
- [5] 胡振學, 「新課程背景下, 提昇教師文化素養的實踐研究」, 中國教育與教學 (J). 2006, 4 (10) : 34-37.
- [6] 文化部文化市場司, 華中師範大學全國農民工文化生活狀況調查課題組, 《當代中國農民工文化狀況調查報告》 [M] 北京: 中國社會科學出版社, 2007 : 12-17-19.
- [7] ヨゼフ・ピーパー, 「閑暇: 文化的基礎」 [M] 北京: 新星出版社, 2005 : 91-92.
- [8] 費孝通, 「反思・對話・文化自覺」, 北京大學學報 (哲學社會科學版) (J). 1997, 3 : 15-22, 158.
- [9] 塞繆爾・亨廷頓, 勞倫斯・哈里斯, 「文化的重要作用」 [M] 北京: 新華出版社, 2002.
- [10] C. 恩伯, M. 恩伯, 「文化的變異」 [M] 沈陽: 遼寧人民出版社, 1988.
- [11] 衣俊卿, 「文化哲學十五講」 [M] 北京: 北京大學出版社, 2004.

中国の幼稚園における 早期閲読のデザインと実施

張 明紅

Zhang Minghong

華東師範大学副教授

◎はじめに

2001年に中国教育部が『幼稚園教育指導要領（施行）』を公布した後、中国で幼児教育に携わる多くの者がこれまでになかった情熱をもって幼稚園早期閲読教育活動に関心を注ぎ、理論および実践の両面で研究活動を展開している。中国学前教育研究会カリキュラムおよび教学専門委員会は2002年、2004年、2009年の計3回にわたって全国幼稚園早期閲読教育學術シンポジウムを開催し、活動を展開、推進してきた。現在、中国幼稚園早期閲読教育は、もはや単純な学科方式の教育内容・教育方法の枠組みに限定されることなく、多次元整合カリキュラム方式へ向けて発展している。

◎幼稚園早期閲読教育における中国の文化的傾向

早期閲読活動において中国が一番力を入れて検討しているのは、早期閲読における中国の文化的傾向である。たとえば中国の子どもが好む早期閲読の読本はどのようなものか？ 中国の幼稚園で行う場合、どのような形式があるか？ 中国文化の価値観と行動様式はどのように次世代に伝えていくのか？ などである。そのほか、中国の子どもの創造性・探求性の方向についての研究を進めている。たとえば、中国の特色ある子ども創造性発達の土台の構築を試み、幼児が早期閲読過程で創造的な探求的学習を行うよう促進し、子どもが幼いころから言語運用学習と創造性を探求する楽しい体験を得られるようにするなどである。また、中国の子どもの批判的思考に対しても調査研究を行っている。中国の長い歴史において、その教育文化は子どもに対して、独立した観察・評論・分析・判断・論証等によって構成される綿

密な思考と決定能力の育成に関心を注ぐことが少なかった。中国の幼児教育カリキュラム（早期閲読を含む）の作成においては、中国の文化背景の特徴と結び付けながら、幼児の批判的思考の萌芽・発達に対し、特に関心を注いだ。

●幼稚園早期閲読教育目標の構築

次に、中国の特色に富む幼稚園早期閲読教育目標体系を構築した。主に幼児の書き言葉学習への興味を高めること、本を好きになること、「自ら本を読む」よい習慣を育てることである。いろいろな記号に興味をもって文字を観察し、文字に対する好奇心と探求心をもつことは、幼児が書き言葉と話し言葉の関連性を認識するのに役立ち、また幼児が早期閲読のスキルや、書き言葉を観察・模倣・予想する能力等を身につけるのにも役立つ。

書き言葉に対する子どもたちの意識と行動について、以下のようないくつかの重要な問題を検討し、解決してきた。

- ・早期閲読は文字を読ませるべきか、それとも絵本を読ませるべきか。
- ・絵本を読む際の早期目標と文学作品を閲読する教育活動にはどのような違いがあるか。
- ・早期閲読の目標をどのように立てるか。ステップをどのように分けるか。

●閲読内容素材の選択

さらに、「子ども中心」の幼稚園早期閲読教育の素材について研究した。その内容は主に、子どもたちの絵本の閲読、遊びの中の閲読、生活の中の閲読、環境の中の閲読などの多元的な組み合わせである。またその素材としては、童話、童謡、科学知識、子ども向けの散文などの絵本が中心となる。

■生活の中の閲読
(上から、観光地の地図、洗濯機の説明書、衣類の洗濯表示)

天涯海角风景区游览线路图

用量指示表 (先浸泡再洗涤, 效果更佳)

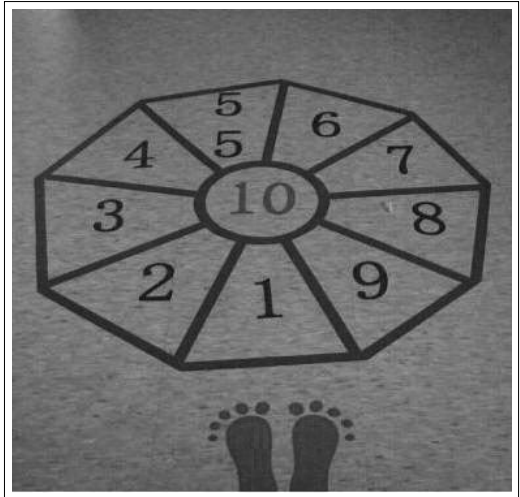
用法	机洗	手洗	
洗涤剂匙	1匙	2/3匙	1/4匙
1500克盒装内附有量匙			
衣物重量	4-5kg	2-3kg	1kg左右
用水量	45L	30L	3-5L

使用滚筒洗衣机时
 ●请根据衣物的污浊程度使用1/3匙至最多2/3匙(25g).
 ●为确保洗衣粉充分溶解, 请先将衣物放进洗衣机内, 再将洗衣粉均匀洒入滚筒。

KANGWEI
 洗涤方法:
 30°C水洗涤
 不可氯漂
 中温熨烫
 阴处晾干

广东·广州康威集团有限公司
 地址: 广州增城新塘康威工业大厦
 电话: (020)38796838 82766911
 传真: (020)38796880 82766788
 邮编: 510620
 网址: HTTP://WWW.KANGWEI.COM.CN
 E-mail: kangwei@public.guangzhou.gd.cn

■遊びの中の閲読（「美容院ごっこ」料金表、数字遊び）



● 閲読教育活動の実施

最後に、さまざまな形式の幼稚園早期閲読教育活動をデザインし、実施した。具体的には、オープン式の図書閲覧室の設置など、子どものためによい閲読環境を作り、閲読エリア活動を推奨して子どもにも自由に閲読させたことが挙げられる。

日常的に異なる年齢の子どもが集まって行う閲読活動、教師の組織するグループでの閲読活動、教師の個別閲読指導、幼児の小グループの探求的閲読活動、幼児の自主的閲読活動、幼稚園が指導する保護者による親子閲読活動などがある。

■閲読の環境づくり



■グループでの閲読活動



■環境の中の閲読（週間天気予報）



シンポジウム

幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響

―日韓中国際比較研究― 2008年度日本調査の結果

● 調査報告、シンポジスト・内田伸子（お茶の水女子大学教授・日本）、李基淑（梨花女子大学教授・韓国）、

周念麗（華東師範大学副教授・中国）

● 司会・榎原洋一（お茶の水女子大学教授・日本）

第1部 各国からの調査報告

日本（内田伸子）

問題

幼児期のリテラシー（読み書き能力）の習得は子どもの認知発達と強い関連がある。また、語彙能力は知能発達や学力適応度の指標になることが明らかにされてきた（内田・1989・2007、東他・1995）。

リテラシー習得に社会文化的要因はどのような影響を及ぼしているかについて明らかにする目的で、お茶の水女子大学グローバルCOE「格差セ

目的

ンシティブな人間発達科学の創成拠点」ではリテラシー習得の日韓中越蒙国際比較調査を推進中である。2008年度に実施した日本調査の結果を報告する。

第1に1995年調査と比較し、第2に、子どものリテラシーや語彙力に社会経済的要因や家庭の教育投資額がどのような影響を及ぼしているか、第3に、しつけスタイルやSDQ尺度によって測定された親の子どもへの敏感性と向社会性評価がリテラシーや語彙力とどのように関連しているかを明らかにすることを目的とする。

方法

1. 幼児調査…3歳児773名、4歳児914名、5歳児920名、合計2607名を対象にして、個別に臨床面接を実施し、①読み書き能力 ②音韻的意識 ③絵画語彙検査 ④アルファベット・リテラシーを測定した。さらに、⑤リテラシーの道具的価値への気づきについて、個別に臨床面接を実施した。

2. 保護者調査…対象児の保護者1780名を対象にして、子ども観、早期教育への取り組み、子どもの向社会性、しつけスタイル、家庭の蔵書数、教育投資額、収入等についてアンケート調査を実施した。

3. 保育者調査・対象児が通園している保育所・幼稚園の保育者193名を対象にして幼児期の文字教育、保育形態、保育環境の設定、子どもへの関わり方などについてアンケート調査を実施した。

結果

I. リテラシー習得に及ぼす経済格差の影響

幼児のリテラシー習得と家庭環境・保育環境との関連についての主な結果は次の通りである。

第1に、1995年調査に比べて、リテラシー習得が早期化（5歳児48%→80%）した。

第2に、リテラシーは3、4歳児では性差（ χ^2 ： $p < 0.001$ ）が見られるが、5歳になると性差はなくなる。語彙力は4、5歳児で性差（ χ^2 ： $p < 0.001$ ）が見られる。

第3に、リテラシーは経済格差（ $Cp = 700$ 万円）の影響が見られ（ $p < 0.001$ ）、特に4歳まで顕著である。語彙力は、加齢に伴い経済格差の影響が顕在化し、5歳児では差が最も大きくなる（ $p < 0.001$ ）。

第4に、保育形態（一斉保育か子ども中心主義保育か）によって、語彙能力に差が見られ（ $p < 0.001$ ）、自由保育の場合に語彙能力が高い。

第5に、共分散構造分析により、リテラシーの習得については3、4歳児までは、経済格差要因（家庭の経済格差、教育投資額差）、親の学歴、家庭の蔵書数、しつけスタイルの影響を受けるが、

5歳児では、経済格差要因の影響はなくなると明らかになった。

第6に、清音の音韻的意識（内因）は5歳児で天井になり、リテラシー習得の教授効果（外因）一斉保育や早期のドリル学習などを顕在化させる。

第7にしつけスタイルは「共有型」・「強制型」・「自己犠牲型」の3因子が抽出された。強制型は低所得層に多く、共有型は高所得層に多い。子どもとおなじ目線に立つ共有型しつけスタイルはSDQ尺度の向社会性の発達と強い関係があることが明らかになった。子どもと対等に楽しい経験を共有するような親の関わりが将来のよい対人関係やコミュニケーション能力の発達に資することが期待される。

II. 語彙力（II学力基盤力）の習得としつけスタイルの関係についての詳細な分析

1. しつけスタイルの分類

しつけスタイル尺度について因子分析を行ったところ、「共有型」（ふれあいを重視し、子どもとの体験を享受・共有する）・「強制型」（大人中心のトップダウンのしつけや力のしつけ）・「自己犠牲型」（子どもが何より大切で、子育て負担感が大きい。育児不安か放任に二極化）の3因子が抽出された。

3つのしつけスタイルのうち、最も標準化得点

の高いしつけスタイルに個人を振り分けた。その結果、共有型33.4%（573名）、強制型35.6%（612名）、自己犠牲型31.0%（532名）とほぼ均等に分類された。

2. しつけスタイルと語彙・リテラシーの関連

それぞれの得点について分散分析を行った結果、リテラシーではしつけスタイルによる差は表れなかったが、語彙においてしつけスタイルの主効果が有意で（ $F(2,1708) = 11.6, p < 0.001$ ）、強制型よりも共有型において語彙の得点が高いと明らかになった（Tukey法： $p < 0.1$ ）。

3. リテラシーと語彙の規定要因に関する重回帰分析

リテラシー・語彙に影響する要因について重回帰分析を行った結果、子どもの年齢、性別、母学歴、収入は全ての得点に対して有意な関連がみられた。強制型と共有型しつけについては、語彙のみ関連がみられた（表1）。さらに分析を行ったところ、語彙得点に対する収入×強制型の交互作用が有意だった（ $\beta = 0.05, p < 0.05$ ）。強制型しつけの影響は、収入低群では認められたが（ $\beta = -1.10, p < 0.05$ ）、収入高群では認められなかった（ $\beta = 0.1, p = 0.70$ ）。収入×共有型の交互作用は有意ではなかった（ $\beta = 0.01, p = 0.63$ ）。

表1 リテラシーと語彙の規定要因に関する重回帰分析

	語彙得点		語彙得点		語彙得点	
	β	r	B	r	B	r
子どもの年齢	.61**	.60***	.55***	.55***	.71***	.71***
子どもの性別	-.08***	-.08**	.08***	.08***	.13***	.12***
収入	.06**	.12***	.09***	.13***	.07***	.10***
母学歴	.12***	.11***	.08***	.07**	.04*	.01 n.s.
強制型しつけ	-.05**	-.04*	-.03 n.s.	-.02 n.s.	.01 n.s.	.03 n.s.
共有型しつけ	.05**	.05*	-.01 n.s.	-.01 n.s.	.02 n.s.	.02 n.s.
R2	0.4		0.33		0.52	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

考察
 リテラシーは5歳になると経済格差や性差要因の影響がみられなくなるが、語彙力(学力基盤力)の指標は加齢に伴い経済格差要因の影響が顕在化する。また、しつけスタイルや家庭の蔵書数も語彙力と強い正の関連をもっている。

収入低群で、なおかつ強制型しつけの傾向が高い場合に語彙得点が有意に低下することが確認さ

れた。特に注目されるのは、低収入層であっても、共有型しつけスタイルをとれば、語彙能力は低下しないという点である。しつけスタイルは親が子どもへの関わり方を変えることにより、制御可能である。

以上より、大人が子どもと対等な関係で触れ合いを重視し、楽しい体験を共有する家庭の子どもの語彙力が豊かになることが示唆された。

家族で団欒や会話を楽しむ雰囲気の中で子どもは内発的な知的好奇心を発揮して環境探索を行い主体的に学んでいるのであろう。

韓国(李基淑)

問題

幼児のリテラシー能力の発達は親と保育者の重要な関心事の一つである。これは韓国だけでなく、日本、中国においても同様であろう。特に、韓国の親は子どもの早期学習と関連して、読み書き能力に多くの関心を注ぎ、現在は早くから子どもの読み書き発達に関する早期教育が行われている。これは、読み書きに関するリテラシー能力の発達が小学校での学習達成度に影響を及ぼし、全ての教科がこのような読み書き能力と関連しているからであろう。読み書き能力が学習の基礎となることを考慮すると、早くから読み書きさせようとする親の気持ちを一概に非難できないところも

あろう。幼児期のリテラシー能力を向上させる方法に慣れていない親は、ドリルに頼り、反復される学習だけを強調しかねない。また、保育者も読み書きに関する明確な知識をもたず、すなわち、幼児にいつ、どのように教えればよいのかに関する明確な教育観を持たないまま幼児に読み書きを教えていることもある。

目的

幼児のリテラシー能力の発達は幼児個人と関わる多様な要因と、幼児が生活している家庭および幼児教育機関など、関連要因によって影響を受ける。一般に、幼児の読み書き能力に及ぼす幼児個人に関連する要因として、幼児の年齢、性別、社会的情緒的能力が挙げられ、家庭環境要因としては家庭の社会的経済的水準、兄弟関係、親の養育態度および信念が挙げられ、教育環境要因としては保育者、クラスの規模と教授法などが挙げられる。そこで、本研究では幼児の個人的要因、家庭環境要因、教育環境要因の3つの要因を考慮して幼児の読み書き能力の発達に及ぼす影響を検討し、さらに、韓国・日本・中国の3カ国の幼児を対象に読み書き能力にこれらの要因がどう関わるのかを比較検討する。

方法

本研究は、ソウル、京畿、仁川地域を中心に

国立・市立幼稚園と区立・市立保育園（44ヶ所）の幼児、保育者、保護者を対象にした。幼児向けの調査、保護者向け質問紙は3歳児（442名）、4歳児（604名）、5歳児（578名）を対象に合計1624名の検査用紙と質問紙を回収して分析した。

結果

本研究の結果、読み書き能力の発達と関連のある全体の傾向は以下のとおりである。

第1に、幼児の年齢、性別、家庭所得水準によってリテラシーの習得に差があるかを調べた結果、幼児の年齢が上がるにつれリテラシー得点が上がリ、全ての年齢で差が出た。

性別によってもリテラシー得点に差があり、女兒は男児より得点が高かった。しかし、性別の違いは加齢に従い、小さくなる傾向があった。英語得点については性別による差はみられなかった。また、家庭の所得によって幼児のリテラシー得点に違いがあることが判明したが、加齢に従って高所得集団と低所得集団の差は小さくなる傾向があった。しかし、英語得点では年齢が上がっても差が維持され、5歳に所得水準による違いが確認された。

第2に、幼児の年齢によるリテラシーの下位要因の相関は低年齢の方でより明確な相関が確認された。

すなわち、3歳児では読み、書き、語彙間の相関が顕著に現れる一方、4歳児では弱い相関、5歳児では読み得点と語彙得点間で弱い正の相関があった。

第3に、家庭の所得および環境によって幼児のリテラシーに違いがあるのかを検討した結果、家庭の所得によって親の日常生活スタイル、所蔵図書数、子どもへの進学希望範囲、私教育実施比率に差があることが確認された。

これと関連して教育投資額が高いほど、幼児のリテラシー関連得点が高いことがわかった。これは、家庭の所得が高いほど、教育投資額も有意に増加するといった結果と関連があり、高所得家庭の高い教育投資額が低年齢幼児のリテラシー能力に影響していると解釈できる。家庭の養育環境における所得と教育への投資は初期には影響するが、幼児の年齢が上がるにつれ、その影響力は低くなっていることがわかる。

第4に、幼児のリテラシー習得と関連して親の養育態度の要因を分析した結果、「共有型」（子どもとの相互作用を多くし、一緒にいるのを楽しむ）、「指示型」（子どもとの疎通が一方的で、子どもの意思よりは決まった指示と規則が優先される）、「犠牲型」（親が子どもに全てを合わせて、親の希望をあきらめて子どもの要求に合わせる）、「統制型」（子どもを統制し、体罰を駆使する）などの

4つの類型が抽出された。所得による養育態度を検討した結果、高所得集団では「共有型」が多く、低所得集団では「指示型」が多かった。「犠牲型」、「統制型」は高所得集団と低所得集団ともに現れ、所得による差はみられなかった。

家庭所得による幼児の社会的能力の違いを検討した結果、高所得集団で向社会的得点が高いことが明らかになった。また、親の養育態度得点を比較した結果、高所得集団で「共有型」の養育点数の平均が高く、低所得集団では「指示型」の養育得点の平均が高かった。親の養育態度による子どもの社会的能力は「共有型」でもっとも高く、以降「統制型」、「犠牲型」、「指示型」の順で表れ、相互作用のかつ双方向的な意思疎通方式を行う「共有型」の養育が向社会的な子どもの気質に影響を与えることがうかがえる。従って、所得水準と関係なく、親の養育態度が相互作用の双方向的な「共有型」になるように親が努力するとき、子どもにより肯定的な社会的傾向が発達していくことが示された。

考察

幼児のリテラシー習得および発達に関連した研究は、幼児は成人のように読み書きができる以前であっても読み書きを学ぶ過程にあり、学校に行く前からすでにリテラシーに関する多くを学ん

ていると主張する (Ferreiro & Teberosky, 1992; Goodman, 1980; Teale & Sulzby, 1986)。このような観点からすると、読み書き能力は認知的で社会的な活動であり、家庭から始まるのである。従って、幼児が日常生活で体験するリテラシー環境を把握し、このような環境が幼児のリテラシー習得および発達に及ぼす影響を研究することは非常に重要である。本研究は幼児のリテラシー習得および発達に影響する要因を検討したもので、究極的には家庭と集団保育の場、両方で活用できる方法を模索し、今後、日韓中3か国間の比較により、興味深い知見が得られることを期待する。

中国 (周念麗)

問題・目的

内田 (1989・2007)、東他 (1995) の研究結果によると、幼児期のリテラシー (読み書き能力) 習得は子どもの認知発達と強い関連がみられ、語彙能力は知能発達や学力適応度を予測する指標となっていることは、幼児期のリテラシー発達の重要性を示唆した。

中国では、幼児のリテラシー発達について、まだほとんど調査が行われていないのが現状である。先行研究によると、経済的に豊かな家庭ほど、子どもの認知能力が高いことから、社会全体

が激しく変化し、特に貧富の差も広がりつつある中国の子どもたちの読み書き能力の実態を把握することは非常に重要である。また、中国で経済改革が行われ、所得の差は保護者の育児スタイル、また幼児のリテラシー習得にどのような影響を与えているのかを調べるために、お茶の水女子大学内田伸子教授がリーダーとなっている「リテラシー習得の日韓中越蒙国際比較調査」に参加し、2009年4月から7月にかけて上海で調査を行った。ここでその結果を報告する。

方法

上海市の保育所 (1カ所) と幼稚園 (計20カ所、私立2、公立18) の園児1779名 (3歳児596名、4歳児615名、5歳児568名)、保護者1040名および保育士118名。経済状況における差異を考慮し、親の所得に応じて、高い経済レベル、中間レベルおよび低いレベルにある3つの行政区からそれぞれ7つの園を選んだ。

2. 調査内容

3〜5歳の幼児に個別の対面調査を実施し、子どもたちの読み、書き、語彙、アルファベット読みの習得度、文字の道具的価値への気づきなどについて調べた。対象児の保護者および在籍している保育所・幼稚園の保育者に対してアンケート調

査を実施した。

結果

1. 幼児のリテラシーの実態に関する調査結果

(1) 年齢差

漢字の読み、書き、語彙、しりとりおよび英語のアルファベット平均得点は、年齢が上がるとともに上昇し、年齢による差は顕著であった。5歳児において、各方面の能力が飛躍的に上昇する傾向がみられた。これは子どもの発達上の要因とも関連しているが、中国で非常に重視されている幼稚園児の入学レディネスに関連しているかもしれない。

(2) 性差

漢字の読み、書き、語彙、しりとりおよび英語のアルファベット認知の平均得点のいずれにおいても、男児と女児の間に有意な差はみられなかった。読みと英語のアルファベット認知について、男児のほうは女児よりもやや有意に高いが、他の能力においては女児のほうの平均得点が男児よりも高かった。中国では「男女平等」が提唱されてからすでに60年あまりが経ち、都市部では子どもの性別を問わずきちんと教育を受けさせることは当たり前になっている。教育機会平等という社会的な要因以外に、女児が男児に比べて得点が高い理由として、女子のほうがおとなしく指示に従い、勉強するときもより集中力が高いなど他にも考え

られる原因はいくつかある。

(3) 幼児のリテラシー能力の間の関連

幼児のリテラシー能力の間にどのような関連があるかについて検討した。

まず、漢字の書き得点に関して、どの年齢においても、書き得点は書き順との間に有意な弱い正の相関がみられた ($r = .206^{**}, .221^{**}, .218^{**}$)。

5歳児を除いて、3歳児と4歳児は書き得点と確認回数も正の相関が認められた。また、4歳児を除いて、3歳児と5歳児では書き得点、書き順と言語補助、確認回数との間に正相関が確認された。さらに、3つの年齢において、いずれも書き得点は読み得点、しりとり得点との間に有意な正相関があった。

また、3、4歳児グループにおいて書き得点と読み得点の間に強い正の相関がみられたが、5歳児の場合、読み得点と語彙得点の間に正の強い相関があった。

2. 経済格差による保護者の育児行動としつけスタイルの差異

今回の調査のもう一つの目的は、経済の格差が「中国ママ」(教育に対して極めて熱心である中国の母親のことを意味している。最近流行語となっている)のしつけスタイルにどのような影響を与えているのかを解明することで、その結果は以下の通りである。

(1) 子どもを習い事/塾(「興味班」)に通わせることとの比較

低所得層と高所得層の間に有意な差がみられ、低所得層の保護者は子どもをより多く(1つか2つ)の習い事、特に外国語系の塾に通わせることがわかった。就学前準備のために子どもを塾に通わせる低所得層の保護者は高所得層保護者の倍となった。この結果から、低所得層の保護者は高所得層の保護者よりも子どもに外国語を習わせる熱意がより強いことが窺える。

(2) 教育投資額と文字を教えることの方に関する比較

低所得層の保護者に比べて、高所得層の保護者は子どもに絵本、物語、漫画、学習雑誌、図鑑の5つの教育に関する書物を買与える数はより多かった。また高所得層保護者は子どもに文字を教えるための考え方として、「文字の豊かな環境におく」、「子どもが興味があるときに教える」という項目の選択率も低所得層より有意に多かった。所得の高い家庭は経済的にゆとりがあるため、より多くの書籍を購入することが可能であり、低所得の家庭の子どもに比べ、高所得の家庭の子どもはより文字の豊かな環境にいられることが推測できる。

(3) 保護者のしつけスタイルの比較

保護者のしつけスタイルについて因子分析を行った結果、「共有調和」、「厳格」と「子ども中心」

という3因子を抽出した。因子得点により群分けした結果、「共有調和型」、「共有厳格型」と「疎遠無視型」という3つのグループとなった。「共有調和型」は親子間では感情の共有ができ、協力的な関係を持っていることを指す。「共有厳格型」は、「共有調和」と「厳格」の得点とともに高く、即ち、子どもと感情の共有ができる一方、子どもを厳しくしつけるタイプのことを指す。「疎遠無視型」は3つの因子得点がすべて低く、親と子どもとの間に距離があり、子どもに対して関心が薄いタイプである。

3. 経済格差が幼児のリテラシー得点に及ぼす影響

今回の調査を通して、保護者の所得の差は幼児のリテラシーに影響を及ぼすことが明らかにされた。表2-4に示されたように、高所得層の子どものリテラシー得点は有意に高かった。子どものリテラシー得点は教育投資額、保護者のしつけスタイルと強い相関がみられた。すなわち、親の教育投資額が多ければ多いほど、幼児のリテラシー得点が高いという傾向があった。幼児のリテラシー得点は保護者のしつけスタイルの「共有調和型」、「共有厳格型」、「疎遠無視型」の順で低くなっている。

表1 保護者の所得としつけタイプの比較

所得	n	共有調和(%)	共有厳格(%)	疎遠無視(%)
高い群	458	63%***	29%	8%
低い群	507	23%*	66%***	11%

表1で示されたように、高所得群には「共有調和型」の比率が最も高く、対照的に、「共有厳格型」において、低所得群の保護者が占める比率が有意に多かった。両群においてどちらも「疎遠無視型」が少なかった。

表2 教育資料(書籍)の投与と幼児のリテラシー能力との相関

	絵本			物語			漫画			稽古			図鑑		
	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳	3歳	4歳	5歳
読み得点	.144*	.166*	0.052	.229**	0.086	.156*	-0.01	-0.081	-0.008	0.114	0.129	0.051	0.098	0.071	0.084
書き得点	.175**	0.021	0.044	.139*	0.035	.156*	0.021	0.026	0.022	0.072	0.084	0.023	0.05	0.039	0.06
語彙得点	.295*	0.132	0.198	.280*	0.221	0.384	-0.12	0.25	0.333	0.198	0.181	0.159	.274*	0.145	-0.134

表3 親のしつけのタイプにおける幼児のリテラシー能力の差の検証

しつけタイプ	読み得点			書き得点		
	n	Mean	SD	n	Mean	SD
共有調和型	371	38.88***	35.75	396	7.26*	2.80
共有厳格型	159	37.77	35.70	161	7.02	3.03
疎遠無視型	290	34.39	35.73	311	6.88	2.71

表4 親の教育投資額における幼児のリテラシー能力の差の検証

教育投資額レベル	書き得点			英語得点			読み得点		
	n	Mean	SD	n	Mean	SD	n	Mean	SD
レベル1	235	6.86	2.73	235	5.03	8.20	235	31.36	34.24
レベル2	293	6.97	2.79	293	6.7	9.72	293	33.92	34.62
レベル3	214	7.21	2.85	214	10.25**	11.42	214	46.05***	36.58
レベル4	44	7.36	3.07	44	13.05***	13.85	44	46.59***	39.39

※(レベル1 : <300元/月; レベル2 : 300 ~ 600元/月; レベル3 : 600 ~ 1200元/月; レベル4 : >1200元/月)

※ *** p<.001, ** p<.01, * p<.05

考察

幼児のリテラシー発達は発達の要因によって、年齢が上がるに伴い上昇していく傾向が見られたが、保護者のしつけスタイルや教育投資額など社会的な要因もリテラシー得点に影響を与えて

資料

いて、所得の差が大きく作用していることが明らかになった。我々は所得の差を埋めることはできないが、今回の調査を通して、心に余裕をもって、子どもとよりよい親子関係を築き、よりよい学習環境を作

ることは、子どもの読み書きに関する興味を引き起こすことにプラスに働くという結果を保護者たちに理解してもらうことは意味があるだろう。

質疑応答

一見 国立教育政策研究所の一見と申します。周先生のご報告によれば、幼児のリテラシーの発達の中で、中国ではあまり性差が出なかったということですので。その理由についてお考えをおうかがいしたい。

榑原 それでは周先生。

周 なぜ男女差がないのかというと、多分男女平等ということが提唱されて60年も経たからだろうと思います。また、今回の調査の対象は上海であり、上海は中国において最も進んでいる都市ですから、女兒は男児ほど勉強しなくてもいいという考えをもっている親は少ないだろうと推測しております。

ただ、読むことと英語のアルファベットと言葉の3つは男児の方が女児よりちょっと高い、けれども、女兒の方は書くことがちょっと高かったです。

榑原 内田先生、補足することは。

内田 細かく見ていくと中国でも性差が出ています。特に内因、成熟の要因による立ち居振る舞いには性差が表れる。しかし、5歳になると、それがなくなり、追いついてくる。

これは3カ国共通です。

もうひとつは、テストの形式が性差を引き出しやすいということもあります。言語知性を反映しやすいテストになると、どうしても女兒の点数が高くなる傾向があります。すなわち、使用したテストの形式と、成熟の要因と双方が絡んで性差が生じるのだと考えられます。

榑原 どうぞ、他の質問お願いします。

相良 西九州大学の相良と申します。周先生にご質問です。興味班です、これが低所得の家庭で行なわれていて、高所得の家庭では行なわれない。日本人の感覚と逆だなという気がするのですが、その背景をうかがいたいと思います。

榑原 周先生、どうぞでしょう。

周 まず一つの背景は経済能力。高所得の家庭は、外部の塾など

を活用していて、興味班を利用しないのかもしれませんが。

もう一つの問題は親たちの考え方。高学歴の親ほど子どもにもっと遊ばせたい、もっと自由に成長してほしいと考えているのではないかと。他の調査ではそのようなデータが出ています。一方、低所得の親たちはもっと子どもに早くいろいろな知識をマスターしてほしいという考えがあり、多分この2つのことが絡んでいて、日本と逆転した現象が出ているかもしれません。

榑原 ありがとうございます。私から、李先生にご質問したいのですが、所得と言語能力の関係というのは日本と韓国で似たような結果になっているのですが、所得と教育投資額は明らかな相関があるのでしょうか。先生のお考えをちょっとお聞かせ願いたいと思います。

李 所得と教育投資額と関連があるかということですが、韓国でも中国同様に所得は低いのに親が犠牲になり、教育投資額を増やすという傾向もみられます。所得と教育投資額を単純にイコールとみることはできないと思います。

榑原 ありがとうございます。

どうぞ、李先生。

朱 今回の共同研究は、子どもたちのリテラシー、特に読むことと書くことに重点を置いた研究だと理解をいたします。では、読む能力や書く能力、これは一体、人間が子どもとして発展していく過程で身につけていくようなものなのか、それとも外部から子どもたちに何らかの教育をする結果としてたらされるものなのか。議論の前提として、それが実はあまりはつきりしていないと思います。

もちろん家庭の所得水準やあるいは親の学歴、あるいは教養面は、ある意味ではとても重要な要素だとは思いますが、私としては、むしろこの3カ国に共通する文化的な要因や、特に保護者が子どもの読み書き

の能力に対してどれだけ注目をしているか、あるいは文化的背景のもとで知らず知らずのうちに子どもたちと与えられている影響、そういうものの方がもしかしたら大きいのではないかと思えます。

この調査は始めたばかりですが、さらに突っ込んでいくと、とても影響力のあるいい調査になると思います。例えば、似たところの多い3カ国でありますが、この3カ国の文化的な違いは何なのか。また、意識とか認識の完全に違うところがどこにあるのか。そういうことを踏まえただで、同じような調査が継続できれば大変すばらしいと思います。

内田 朱先生には、非常に大事なことをおっしゃっていただきました。読み書き能力というのは、これは発達していく過程で起こってくるものなのか、それとも、それ以外の環境要因の影響なのかということなのですが、やはりこれは両方の要因がきているのだと思います。

しかも、環境要因はあまり意識的にしつらえたものではないにもかかわらず、私たちの文化が読み書きを

手に入れたことによって、それがいろいろな環境面にちりばめられている。例えば、母親が新聞を読んだり、父親が読書をしている姿を見てみると、そのようなものがカリキュラムとして子どもの中に内面化していく。

それともう一つはもつと大きな文化の価値。例えば、読み書きをそろばんというのとは3カ国ではすごく大事にされてきました。そのような文化の価値みたいなものが子どもの生活の中に入っていくことになるのだろ

うと思います。それから、これはもうすでにデータがあるのですが、読み書きに価値を置かない親のもとで育った子どもたちがどうなるのかというと、小学校の1年生の9月で他の子どもたちに追いついてしまいます。何が違うかといいますと、読み書きに触れるのが遅かった子どもの方が、文字の読み書き機能についてはっきりと意識していく。つまり、文字って便利、書けるっていいことだと、空間を隔てた相手とのコミュニケーションの価値ある道具であると認識

する。そういう意識は後発の子どもほど高い。これは1989年に私が追跡した研究の中でもはっきりしております。

朱 この研究とは別に、私は韓国の親たちにインタビューしたことがあります。そこで驚くような結果を得ました。親たちは早期読み書きを機械的に導入するというのは、子どもたちにとって有効な教育ではなく、子どもたち一人ひとりにきちんと対応していくほうが大切であることとよくご存じでした。

それなのに、なぜ子どもたちにさかんに早期教育を施そうとするのか。いま親たちは育児に対して、自分の子どもの将来について、とても不安を抱えています。うちの子だけ落ちこぼれるのではないかと気が気ではありません。日本、中国、韓国、3つの国とも、少子化の時代になっており、自分の子どもは宝物という意識があるので、ますますそういう不安かられてしまいます。そのことが早期教育ブームへとつながっているのだと思えます。

ですので、このような親たちを安

心させるためにも、明確な証拠が必要で。このように大規模な比較研究を通して、小学校に入学する前にドリルで学習した子どもたちが小学校に入学してから読み書き能力というものを維持できるのかということについて明確な証拠を親たちに示さなければなりません。

もつともつと早期教育をというのではなく、子どもの絵本読みとか読書を通して、どのような観点に立って、どのように子どもに視線を合わせて、子どもの発達を考えるべきなのか。親への提言のところに目を向けなければなりません。これは3カ国共通に示唆されるべきことであるということをつけ加えたいと思えます。

